

かぶね

No. 2

1976年 8月

日本鞘翅目学会



武田 滋・今坂正一・松田 潔

越智輝雄・水沼哲郎・杉野広一

: 台湾採集地案内(前編).....1

I 北部低山地

(A) 鳥来(Urai)..... 3

(B) 亀山(Kueishan)..... 4

(C) 坪林(Pinglin)..... 4

(D) 石碇(Shintung)..... 4

II 中部山岳地帯

(E) 南山溪(Nanshanchi)..... 5

(F) 日月潭(Jiuyuantan)..... 7

(G) 霧社(Wushe)..... 7

(H) 芦山温泉(Lushan)..... 8

(I) 松崗~梅峯(Sungkang~Meifeng)..... 9

(J) 梨山(Lishan).....10

(K) 阿里山(Mt.Alishan).....11

(L) 奮起湖(Fenchifu).....12

露木繁雄: 富士山周辺のカミキリ(追加記録 I).....13

会員住所録.....17

編集後記.....24

事務・会計報告.....24

表紙題字: 佐藤千枝

表紙カット: 藤田英二

表紙.....

雨の南山溪とカタツノハナカミキリ(円内)。かつてはかなり珍しいハナカミキリと思われていたが、雨の日の花によく集ることが判ってからは、そう得難い種でもなくなった。沖縄本島でも最近、チビカタアカクロハナが雨天の花に多く飛来することが知られている。必ずしも好天=好機とはならない一例。(藤田宏)

台湾採集地案内

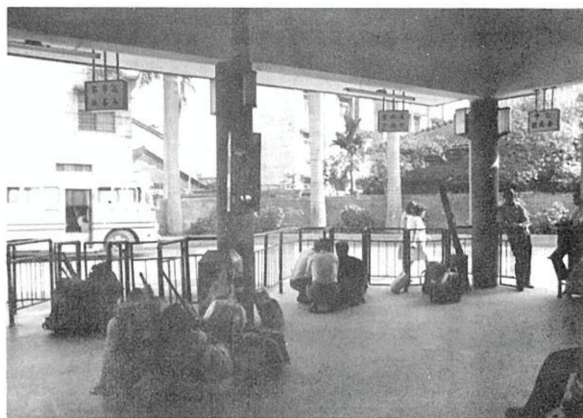
(本文1~12ページ)



○ダイウレイ付近



○埔里の標本商、余清金氏(左)と筆者の1人今坂(右)



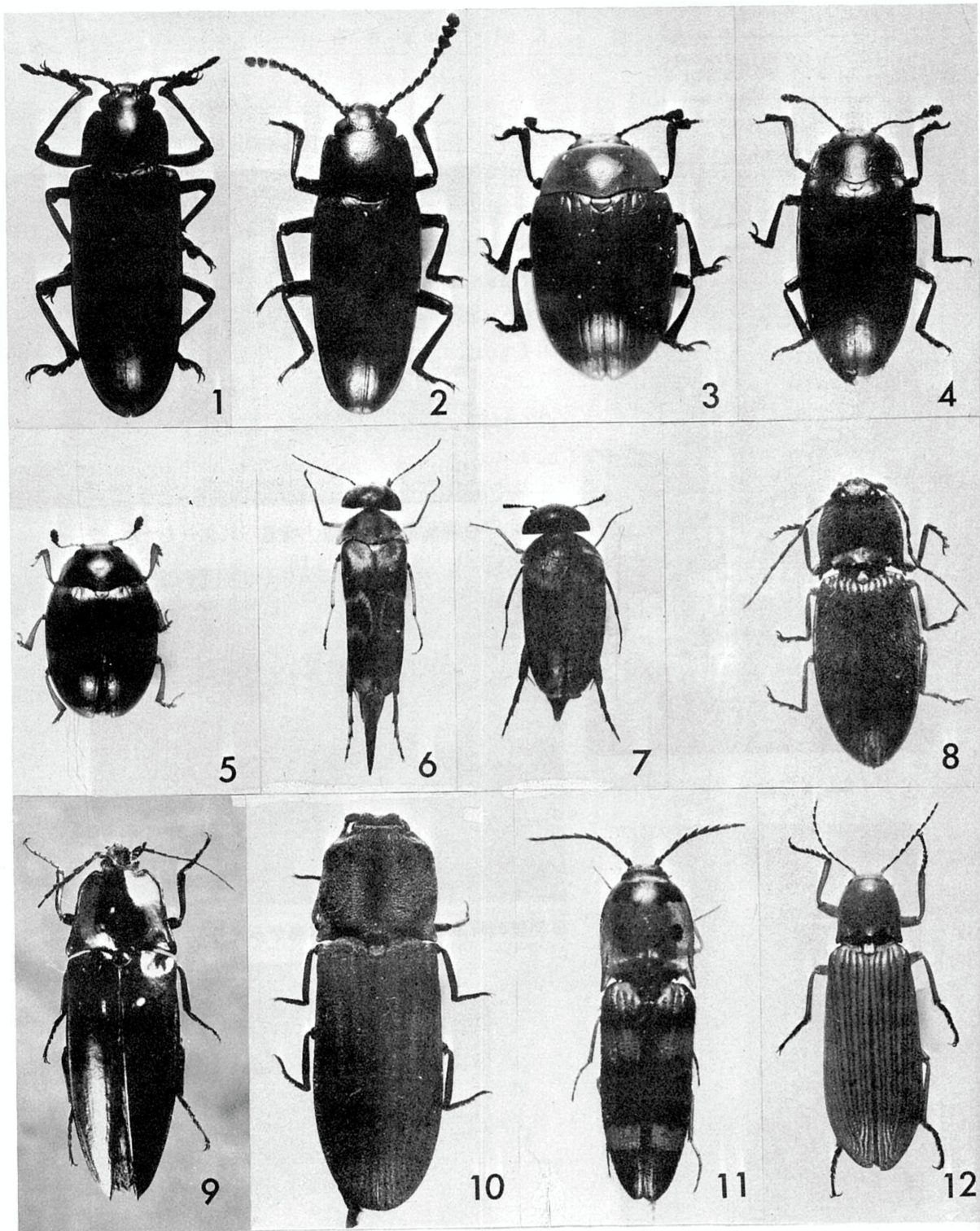
○採集地への起点、埔里バスターミナル



○埔里の町並み (左手に標本商がみえる)



○*Thranisus*(トラフホソバネカミキリ属)の新種がやってくる小屋 (芦山温泉)



1. *Encaustes cruenta formosana*
 4. *Aulacochilus issikii*
 7. *Tomoxia*? sp.
 10. *Sulcilacon sanguineus*

2. *Megalodacne asahinai*
 5. *Cyrtotriplax gressitti*
 8. *Csikia* sp.
 11. *Melanoxanthus 4-guttatus*

3. *Neotriplax arisana*
 6. *Glipa azumai*
 9. *Campsosternus gemma*
 12. *Hemiops flava*

13.
 16.
 19.
 22.
 25.

台湾の甲虫



13



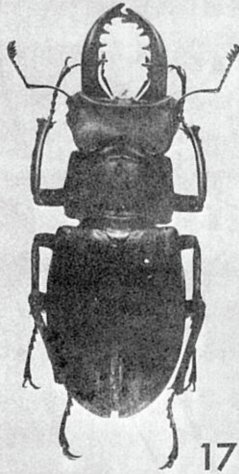
14



15



16



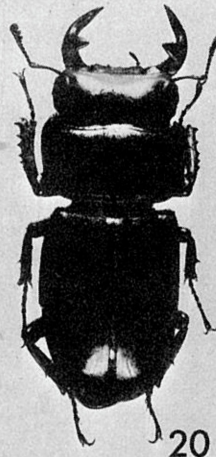
17



18



19



20



21



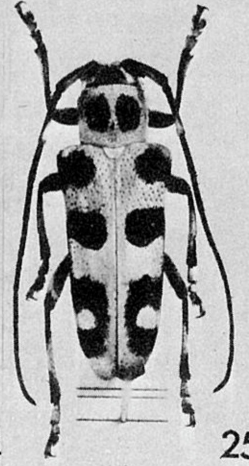
22



23



24



25

13. タイワンカブリモドキ(山地型)
 16. タカサゴミヤマクワガタ
 19. モチツキクワガタ
 22. タイワンクスジトラカミキリ
 25. *Paraglenea swinhoei*

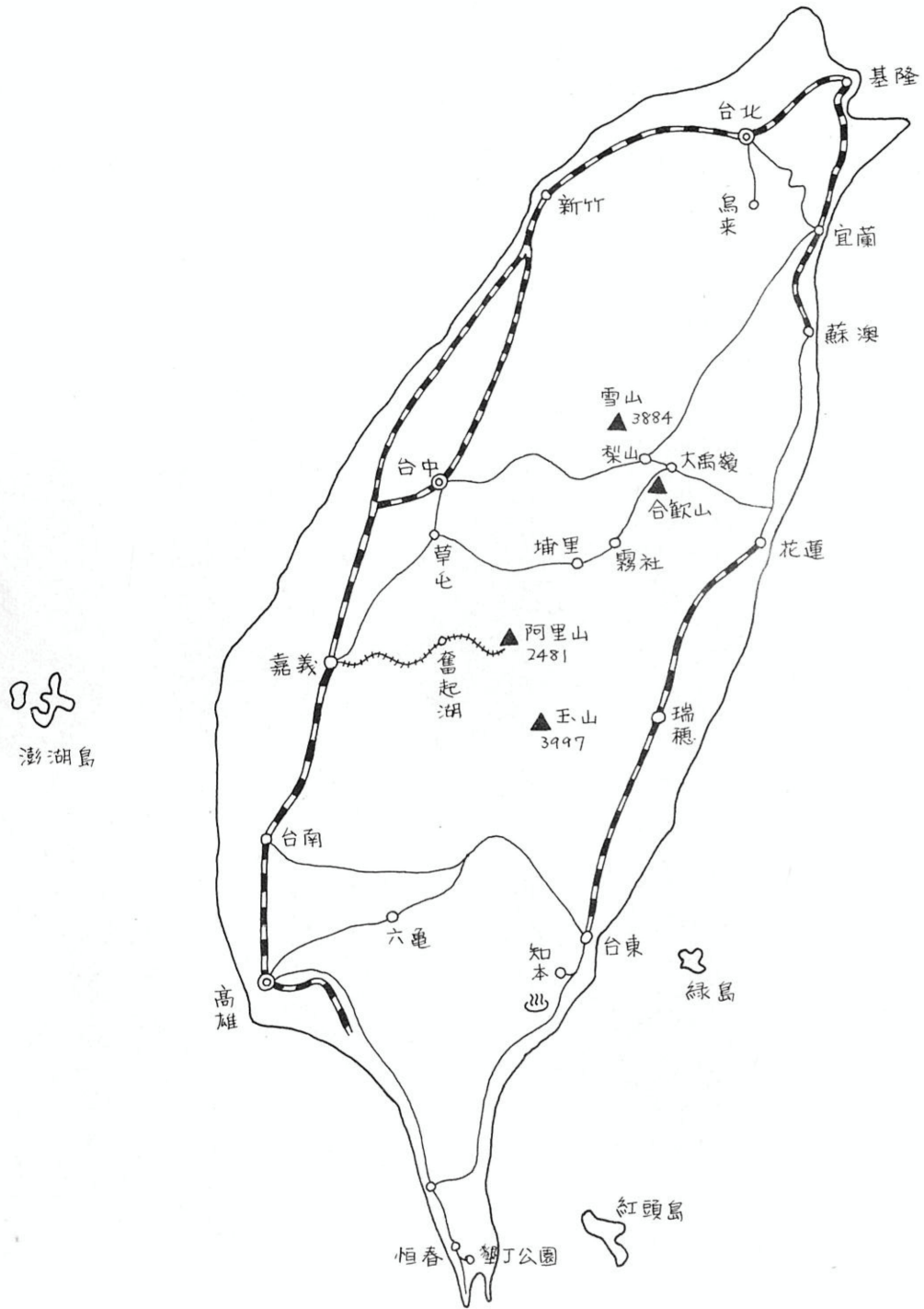
14. *Apotomopterus sauteri*
 17. クリイロミヤマクワガタ
 20. ツノボソオクワガタ
 23. ベニツヤカミキリ

15. タイワンヒゲコガネ
 18. ヤマダクワガタ
 21. キムネムラサキカミキリ
 24. *Anoplophora lurida*

na

gemma

台湾概念图



台湾採集地案内(前編)

武田 滋・今坂 正一・松田 潔
越智 輝雄・水沼 哲郎・杉野 広一

§ 1 はじめに

世界の各地から、蝶屋の便りが届く昨今、我々アマチュア甲虫屋も、ようやく台湾を初めタイ・マレーシア・インドネシア等東南アジア方面へ遠征する時代となった。とりわけ、1960年代後半から1970年代初頭にかけて、一部の甲虫屋が台湾や琉球の離島へ渡り、南国の虫を持ち帰ったことは、その後一種の“離島ブーム”ともいべき状況をつくり出している。南の虫の豊かな色彩と変化に富んだ形態は、日本の虫には少々食傷気味の我々に、鮮烈な印象を与え、より自然の残された台湾へ、マレーシアへ、原始そのもののセレベス・ボルネオへと我々の夢をかきたてる。甲虫屋が着実に蝶屋の後を追うというのは、自然の法則なのかも知れない。

ただいたずらに種類数を増やすのではなく、より広い視野から日本の虫を見つめ直し、日本の虫の世界における位置を考え、あるいは、進化や生態の方面に我々の注意が喚起される契機となるならば、海外遠征も意義あるものとなるだろう。現在、東南アジアの甲虫相の研究は、ごく少数のFamilyを除いてまったくの手つかずの状態と言える。一部の専門家まかせにせず、アマチュアが自らの手で甲虫相の解明に貢献する余地は、十二分に残されているのである。

が、ここで、落してはならない問題がある。バンコクにおける反日デモに象徴されるごとく、一部の日本企業・日本人観光客の東南アジアでの行動が、厳しい批判的となっている。資源と労働力を収奪し、公害(観光公害を含めて)を置き去りにする彼等の振舞は、東南アジア各国の自然と民衆の生活を破壊するものである。『アジアの先進国日本』という差別意識を持つならば、虫屋といえどもこの実情と無縁ではありえない。台湾埔里の標本商での盗難事件は論外としても、石垣島おもと公民館事件を初め、最近の一部若手虫屋の採集モラル、否、採集以前のモラルを考える時、このことはいくら強調しても、強調しすぎではない。海外での虫屋の節度ある行動を望む次第である。

以下の内容は、甲虫類の採集に初めて台湾へ渡る人を対象に書かれた採集地案内である。執筆者により、興味の対象が異なるため、文中に登場する虫のFamilyが片寄り、文章も不統一であるが、お許し願いたい。

本文を書くにあたって、正木清・畑山武一郎両氏の協力を得、また標本写真撮影には、石原俊雄氏の労を煩した。明記して深謝する次第である。

武田：(▽ 606) 京都市左京区下鴨芝本町 37 今坂：(▽ 855) 島原市白土町 1064
松田：(▽ 665) 宝塚市花屋敷松ヶ丘 15 - 27 越智：(▽ 544) 大阪市生野区林寺町 2 - 21
水沼：(▽ 571) 門真市大字打越 393 - 1 杉野：(▽ 663) 西宮市上田市 4 - 148

§ 2 台湾での採集に関する諸注意

i) ビザの延長に関して

台湾へ渡るには、パスポートの他にビザ(査証)が必要である。有効期限は一ヶ月間だが、現地でさらに1ヶ月に限り延長できる。延長手続は、各県の警察局または台北市警察局で行ない、通常2〜3日かかる。手続の時期は、有効期限の切れる3〜4日前が適当で、あまり早過ぎても、また逆に遅過ぎてもトラブルの原因となるので注意されたい。駄足になるが、台北市警察局では、中国語または英語しか通用しない。

ii) 採集禁止地区に関して

台湾では、軍事的・政治的配慮から、外国人観光客はもちろん台湾人でさえ立ち入れない地区が非常に多い。特に虫屋の行動領域である山岳部は、ほとんどの場合、入山許可証が必要である。採集地を選ぶ際には、必ず現地の人から、許可証が必要かどうかを確認せねばならない。採集地として以下で紹介する場所は、許可証は不要だが、原則として道路から15m以上離れて山林へ立ち入ることはできない。したがって、昨年あたり、南山溪での採集の折、警察官に注意を受けた者もいるが、このような時には無用なトラブルは避け、警察官の指示に従って頂きたい。

iii) 毒ヘビに関して

ヒョップダ・アマガサヘビ・タイワンコブラ・アオハブ等琉球のハブクラス以上の強い毒を持つ毒ヘビが、数種棲息する。過度に神経質になる必要はないが、充分注意がいる。ヒョップダに噛まれると、文字通り百歩歩かないうちに死亡してしまうと言われている。

旅館に関して

iv) 台湾の旅館は、すべて素泊りである。賓館や大飯店は、高級ホテルで、日本の一流ホテルと同じ位の料金をとる。虫屋には、大旅社・旅社クラスが格安(日本円で五百円位)で無難である。経費節約のため、テントを持ち込もうなどと考える人がいるかもしれないが、ii)に述べた事情で、そのようなことはやめること。

v) その他

台湾は、東南アジアの中では、比較的治安もよく、40代以上の人には、日本語が通じる場合が多く、往々にして外国であることを忘れ勝ちである。風俗習慣の相違から、些細な事でトラブルを起すことがあるので、郷に入っては郷に従うようにして欲しい。また、虫屋の接する機会の多い高砂族の人々は、日本人に対して驚くほど友好的だが、程度を越えて好意に甘える事は、差し控えるべきであろう。

以下 I 北部低山地 II 中部山岳地帯
III 南部低山地 IV 東部海岸地区
の順に、採集地を紹介する。

§ 3 台湾採集地案内

I 北部低山地

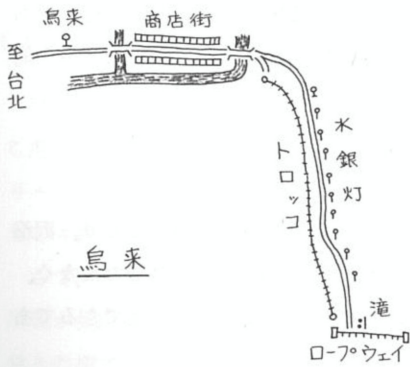
通常、採集の重点は、中部山岳地帯であるが、ビザの延長手続や移動の関係上、2~3日を台北で過ぎねばならないことがある。そのような時、市内より2時間以内で行ける、手軽な採集地を2~3ヶ所あげておこう。いずれも現在は、観光地や樹相の貧弱な場所になってしまったが、昔からの有名採集地もあり、北部にしか見られない虫もいるので、一度は訪れてみるのもよいだろう。



(A) 烏来 (Urai)

烏来は、陽明山(草山)と並んで、昔からの著名な採集地であり、かつ数多い台湾の湯治場の中で、新北投と共に日本人にはお馴染みの場所である。駄足ながら、この滝は、日光の華嚴の滝など足もとにもおよばないシロモノで、一見の価値がある。

台北駅からバスで1時間20分、想思樹の続くつまらない景色が、町の入口の歓迎門をくぐると一変し、何やら得体のしれない生き物が出て来そうな原生林となる。バスを降り、滝を目当てに歩く。しばらくは土産物屋、旅社が軒を連ねるが、家並みがつきると、大きな橋が掛っている。この橋の近くから滝の前までトロッコに乗ってゆることができる。もちろん、軌道より下手にある道を歩いてもよい。トロッコの終点で烏来の家並は終りとなり、観光客はロープウェイで滝の上流へと行くこともできる。



さて、烏来での最も効果的な採集は、夜間採集であろう。昼間は観光客が多いので、ピーティングなどやる雰囲気ではない。夜の帳が下り始めると、ネット・毒ビン・懐中電灯を携えて、トロッコ沿道の水銀灯を見回してみよう。川沿いの道側には、切株に似せたガードレールがあり、多数のゴミダマ・コガネムシ類が見られ、ヒラタクワガタ・フタテンアカクワガタなどが、容易に採集出来る。7月頃であれば、マルバネノコギリクワガタ・ホソアカクワガタ *Cyclomnatus scutellaris multidentatus* も見られ、運がよければ珍品トサカホソアカクワガタ *C. mniszeczki* も採れる。コガネ類では、現在はもう珍種となってしまった台湾ヒゲコガネ

(写真15)が、やはり7月に採集でき、ムシジコガネ(原名亜種)なども産する。原生林の中には、美しい大型のルリメダカハンミョウ *Threates fruhstorferi sauteri* や *T. clavicornis albo-obliquatus*、それに *Cicindela elisae reductelineata* などのハンミョウがいる。しかし、原生林への立ち入りは禁止されているので、あまり奥まで入ることはできない。

(B) 龜山 (Kueishan)

台北站を出た烏来行きバスは、市街を30分ほど走り、坪林への分岐点新店へ着く。バスはさらに川を右に見て走り、約1時間で川の右側へ移る。本来の龜山の谷へ入るなら、この橋の直前のバス停で降り、川岸沿いの道を左へとれば良い。この谷は、相当奥が深く、ずっと先までゆけば面白いだろう。ともかく筆者はそちらへは行かず、次の「龜山路」のバス停で降りた。進行方向に向かって右側に貯木場があり、ここではトラカミキリを2種見ただけだったが、時期が良ければもっと成果があるかもしれない。貯木場の裏はよく茂った山で、ナイターでもすれば面白そうだ。ただし、龜山には旅社は1軒もない。

さて、バス停から100mほどもどって、右へ折れると吊橋が掛っている。それを渡り次の分岐で右へ行く。左は発電所があり、行き止まりだ。分岐からは、ゆっくりした登りで、5月上旬であれば右側にアカメガシワの花がある。この道は、小さな部落をいくつか経て〇〇潭と言う池に通じるらしく、そのような意味の標示がある。途中のアカメガシワの花では、*Merionoeda uraiensis*、*Rhaphuma testaceiceps*、*Pyrestes*などカミキリ亜科のグループが採れ、右の山側には、所々伐採枝があって、叩けば *Uraecha formosana*、*Mimectatina*、*Bumetopia*などが落ちる。池までの往復が、ちょうど1日の行程である。このコースは、比較的楽ではあるが、前述の谷をつめる方が成果も大きいと思うので、そちらの方をお勧めする次第である。



(C) 坪林 (Pinglin)

台北駅からバスで一時間あまり、1つ峠を越えた谷筋の採集地である。峠付近の方が、採集には向いているようだが、林相は単純で多くは期待できない。しかし、ここには旅社もあるので、腹を落つけて夜間採集を試みても良いだろう。5月には、やはりアカメガシワの花があり、飛行機待ちの時に立ち寄っても良い。

(D) 石碇 (Shintung)

台北より同様に1時間あまりの所で、坪林と似た環境である。谷筋がいくつも交わり、沢沿いの脇道を少しそれてゆくとかなり面白く、伐採も行なわれている。しかし、林相が豊富ではなく、種類数は期待できない。松・杉・相思樹など特殊なものも多く、それに応じたものが採集できるであろう。

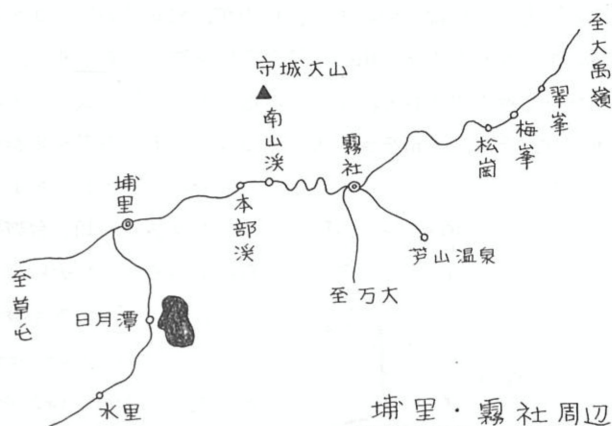
II 中部山岳地帯

台湾の中央部には、雪山・合歓山・玉山を中心に、3500m近い山塊が南北に走り、島の屋台骨を形成している。そのほぼ中央に埔里の町があり、虫屋にとっては台湾最大の根拠地となっている。

以下埔里の町について紹介しよう。

台中から公路局(台湾の国鉄)の直達バスで2時間、したがって台北空港に早到着けば、埔里へは、

昼過ぎに到着する。埔里は盆地の上
上に開けた南投県有数の大きな町
で、さしづめ台湾の松本といった
感じである。紹興酒の大工場が街
の入口にあり、表通りには蝶や甲
虫の看板を立てた昆虫標本商の店
が沢山見られる。埔里の中心は、
バスターミナルで、県警前のロー
タリーを少し入った所にあり、こ
こから日月潭～水里、霧社～萬大
～翠峯、草屯～台中行の3本の路



線バスが出ている。このバスを利用すると、観音寺日月潭、本部溪、南山溪、松崗等の好採集地へ比較的楽に行くことができる。埔里は観光地でないため旅社の数もそれほど多くない。その中で、バスターミナルに近く安心して泊れる旅社として、日月旅社・東京大旅社・東峯大旅社の3軒があげられる。初めて中部で採集する人は、このうち東峯大旅社の安い個室(日本円で五百円位)に投宿すると良い。この旅社の主人徐清金氏は、埔里最大の標本商で、旅社の1階はカウンターを除くと木星昆虫採集所と標本の加工場となっている。

ところで、台湾の旅社は食事抜きである。埔里のこれらの旅社に泊っても事情は同じで、食事は別に外で取らねばならない。幸い、埔里では、街中に飯店・日本料理店・食堂・屋台店が多いので、自分に合った店を自由に探すことができる。採集を終え、旅社に戻って一息つくと、夕食をどこで食べるかが、残された唯一の楽しみとなる。

埔里の街中には、採集できる場所はないが、周囲には有望な林が、ずいぶん残っているようだ。しかし今まで誰も積極的に採集を試みた者はいない。

(E) 南山溪 (Nanshanxi)

埔里から霧社方面行きのバスで約30分、初心者経験者を問わず採集家の最も頻りに訪れるのが、ここ南山溪である。4月上旬～7月上旬であれば、だいたい当りはずれがないのは、シイ・ミズキ・クリ・アカメガシワ等の花が次々に咲き、花の絶え間がほとんどないからであろう。シイの花が満開となる4月中下旬～5月上旬が、訪花性甲虫にとって、最も良い時期と言える。

さて、停留所名を一言も案内しない車掌に腹を立てながら、バス停「南山溪」で下車すると、すぐ吊橋が見える。橋を渡って部落を過ぎ沢沿いに畑の中をゆけば、一本道で間違えることはない。原生林との境まで30分ほど梅畑が続くが、途中ミズキやクリの花が点在し、これらの花を掏ると日本とは比較にならぬ程のおびただしい甲虫が入り、あきれてしまう。無数のマメゾウ・ヒメハナノミ類・コアオハナムグリ・クロハナムグリ・クロハナムグリモドキ、上翅の赤いベニボタル *Cautrires diversicollis*・*C. fainanensis*、黄色の小型カミキリ *Microdebilissa*、*Rhaphuma testaceiceps* など色とりどりの虫がネットの底でうごめく様は、台湾の採集ならでのことである。路傍の適当な硬さの牛糞を捜せば、タイワンダイコクをはじめ、多数の食糞性コガネが得られ、時間の経つのを忘れてしまう。しかし本命は、やはり原生林の中に咲き乱れるシイの花。ここで時間を食うと能率が

悪くなる。と言うのは、台湾では、虫の花に来る時間帯が9~11時頃までで、それ以後は、数が極端に減ってしまうからだ。梅畑が終り原生林に入るあたりで、沢に竹の橋が掛り、道が2つに分かれる。どちらを進んでも良く、もうこのあたりは見渡す限りシイの花。が、残念ながらほとんどの場合ネットが届かない。8mを越すゼフ用の竿でさえ花の下端をかすめる程度である。それでも、よく捜



せば竿の届く木が必ず1本や2本は見つかる。この花で特に多いのがコメツキ類。台湾のコメツキは現在まで180種ほどが知られているが、おそらくその倍以上産するだろう。南山溪は、松崗とならぶコメツキの多産地である。*Pseudelater habunensis*、*Vuilletus mushanus*、*Agriotes nokozanus* や上翅が黒色の *Ampedus* グループが多く、*Gampenthes montivagus*、*Ampedus fulvipennis*、*Hayekpenthes parallelaris*、などが得られることもある。カミキリでは、*Anoplodera*、*Strangalia* やトラカミキリを初めカミキリ亜科の仲間の種類数が非常に多い。台湾特産属のハナカミキリ *Kouichius* は、南山溪以外ではほとんど得られていない。

竹の橋を渡って少し行き、左側の急斜面を登ると、有名なネキのポイントがある。台湾産 *Necydalis* 5種のうち、実際にこのポイントだけで計4種、しかも同時期に得られるというから、驚かざるを得ない。*N. nanshanensis* が最も多く、*N. mizunumai* と *N. hirayamai* はきわめて少ないらしい。竹の橋を渡らずに、沢沿いに道を進めば、途中梅畑や杉の植林を経て守城大山山頂(2420m)まで5~6時間だが分岐が多く道も険しい。

5月中旬を過ぎ、日本の真夏のような気候になると虫の数も急に増す。林内の倒木や立枯れからは、ヒラタ・ミヤマヒラタ・チビ・タイワンネプト・ヒメネプト・タイワンミヤマ・シカ・タイワンオオ・シェンクリングオオクワガタなどのクワガタ類が得られ、朽木をくずすと、巨大なクロツヤムシが姿を表わす。稀には、日本の *Horatocera nipponica* に近縁の *H. similis* や *Callirrhops formosana* 等のクシヒゲムシ類も採集されている。また *Episcapha morawitzi magna*、*Aulacochilus bedeli* がキノコに群がり、大型のタイワンオオテントウムシダマシの生きている姿は、目をみはらせる美しさがある。このあたりは、*Tritoma yamajii nanshanchica*、*Microstenus tricolor taiwanicus* の Type-locality でもあるので注意を要する。

原生林内の陽溜りのような場所で休んでいると、今まで気付かなかったいろいろな虫が目につく。ハナノミ類では、*Glipe malaccana*、*G. pici*、稀には *G. sauteri* が葉上を独特の飛び方で目まぐるしく動き回る。佐多岬産を Type に記載された種で、最近西表島でも記録された *G. azumai* (写真6)も昨年5月末に得られ、*Tomoxia* に近い未記録属種も発見された。(写真7) 樹上性ハンミョウ *Colyblis formosana* も普通に見られ、*Ditoneces* sp. *Plateros* sp. などの小型ベニボタルも葉上に静止している。伐採枝のピーティングでは、*Agrypnus formosana*、*Paralacon agrillacerus shirozui* をはじめ数種の *Agrypninae*、非常に美しい *Thaumastielles elegans* また形態の面白い *Csikia* の各種、個体変異に富む *Chiagosnius obscuripes* 等、やはりコメツキ類の多さに驚かされる。

守城大山への道は、体力に自信のある者でないと無理だが、南山溪の虫相とは著しく異なるので、若干紹介しておこう。南山溪最後の民家を過ぎ杉の植林を抜けると、原生林はいっそう深くなり、正に深山幽谷の感がする。例えばカミキリでは、これまでピーティングで得られた *Mimorsidis taiwanensis* が *Dolophrades annulicornis* と混棲する状態が続き、高度が増すにつれ完全に *Dolophrades* に置き替る。同じように、*Blepephaeus decoloratus* は *B. ziczac* に替り *Acalolepta* も *A. formosana* 以外に3種ほど種類数が増す。立枯や倒木では、やはり南山溪では得られないスジ・セスジオオ・ヒメツノヒョウタンなどのクワガタが見られ、大きなコブを持ったゴミムシ *Catascopus sauteri* がいることもある。林間を飛ぶアカヘリオオアオコメツキ・タイワンキンカナブンを採りながら、喘ぎ喘ぎ峠(1800m)に達すると、足が棒のようになってしまう。この峠付近に糖蜜トラップを仕掛けると、ザウテリオサが普通に入り副産物として、ノコギリカミキリの1種 *Dorysthenes* sp. やドロマルバネクワガタ等が得られた(8~9月)。峠から山頂までは2時間余りだが、虫の数は少ない。山頂一帯はタイワンヒノキの純林で、ビャクシン・タイワンヒメスギ等のカミキリが期待される。

なお、峠付近には台湾では数少ないクマが出没し、ヒョウバダも多いと聞く。充分注意されたい。

(F) 日月潭 (Jiuyuantan)

埔里から観光気分で、ちょっと目先を変えた所へ行こうと思えば、この日月潭が良いだろう。ここは、台湾でも有数の観光地で、日本からのツアーでは、決して立ち寄る場所である。ちょうど、中禅寺湖のような広々とした湖でのんびりと休養するにはもってこいだ。埔里からは、朝のうち30分毎にバスの便がある。

さて、埔里を出て30分、「日月潭」下車。ここから湖を半周する玄奘寺行のバス便もある。対岸に見える文武廟まで、ぶらぶらと歩いても20分ほ

どだ。廂の前には、民族衣装を着けた高砂族の娘が待ち受け、写真を撮らないかと声をかける。もちろん料金が必要。湖へ降りる階段の囲りには、4月中下旬であれば、シイの花が咲き、*Leontium lameeri*、*Dere kirai*、*Anoplodera cyanea izumii*、*Molorchus*、*Obrium*、*Microdebilssa* などの小型カミキリが採れ、時には *Strangalia mitonoi* など思わぬものをネットインできることもある。他に、ヒメハナノミ類やハナムグリ類も個体数は多い。湖のすぐそばで生葉をピーティングすると、数種の美しいチョッキリ類が得られ、ジンガサハムシのキラキラする姿や珍奇な形のムシクソハムシも2~3種見られる。足もとのイネ科植物には、トゲの特別長いトゲトゲ *Dactylispa sauteri* や1本爪の *Hispellinus callicanthus* が比較的多い。

5月中旬以降であれば、徳化社まで足を伸ばすと良い。この付近には原生林が残っており、シイタケのほか木でベニボンカミキリ *Eurybatus lesnei* の記録がある。

(G) 霧社 (Wushe)

霧社は埔里の北東30kmにある。標高は1040m。桜並木と杉林にかこまれた山間の静かな観光地であ

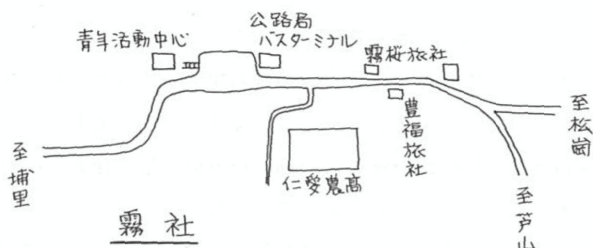


る。街の中心部には、200 mほどの幅広い道が縦に走り、この両側に観光客相手のみやげ物屋、飲食店が軒を連ねている。

霧社も埔里と同様に、採集地と言うより根拠地に向いている。街の中に手頃な旅社・商店・食堂が多く、交通の便もい

たって良い。旅社は、霧桜旅社と豊福旅社の2軒がある。宿泊料は、35元～75元の間で(1元=7.5円位)、安く泊るには相部屋を我慢しなければならない。居心地は、どちらも大差ないが、霧桜旅社の方は、裏庭に蛍光灯を持ち出して灯火採集ができる。しかし街中にも多数の水銀灯があり、これらを見て回るだけで結構面白いものが得られる。4月下旬～5月中旬、灯火にはタイワンアオドウガネ *Anomala expansa* が沢山集まり、*Metopodontus blanchardi*、*Dorcus spp.*、*Gnaphaloryx velutinus*、*Nigidius actangulus* 等のクワガタが地面や壁に見られる。カミキリでは、同じく灯火で少ないながらも *Batocera davidi*、*B. lineolata*、*Olenecamptus cretaceus marginatus* 等の主として大～中型のものが採集される。

昼間の採集は、曇りの日や移動日を利用して済すと良く、丸1日費す必要はない。霧社で満足な採集ができる場所は、仁愛農高(霧社の農業高校)構内と裏のクリ林ぐらいで、この構内にある桜並木は霧社の名所の1つになっているが、ここに4月中旬～下旬の短い期間、ムシャミヤマカミキリ *Hemadrius oenochrous* が現れる。また、フタモンウスバカミキリ *Embrisk-Strandia bimaculata* も記録されたが、前者と比べると、はるかに採集例が少ない。この農高の裏は、急な崖になって両側に2本あるジグザグの道を下ると、狭い畑に出る。畑の周囲に枯枝、枯づるの類があり、ピーティングあるいはスウィーピングで、ハナノミの一種 *Tomoxia formosana* (原記載以来久々の記録) やサビカミキリ *Ropica sp.*、*Sybra sp.*、*Pterolophia obscura* 等を採集することができる。畑の下には、少し幅広いしっかりした道がついている。両側は杉の植林が目立つが、下草はピーティングに適す。キイチゴから、青色の金属光沢を持つ *Coraeus sp.* が得られ、シダ類からは何種類かの *Languridae* の仲間が落ちる。ハムシも割と多い。この道をまっすぐ進むとクリ林に出る。4月中旬～5月中旬、クリの大木に花が咲き、晴れた日の午前中に *Aphrodisium sauteri* が花のまわりを飛ぶ。コガネムシとハナノミ類も多く、カミキリ亜科の *Chlorophorus eleodes viridulus*、*C. signaticollis*、*Rhaphuma mushana*、*R. virens*、*Pyrestes curticornis* 等も見られる。フトカミキリでは、半枯れの老木の幹に、テンモンヒゲナガカミキリ *Palimna palimnoides* がとまり、枯枝には *Rondibilis femoratus*、*Ostedes inermis* 等がついている。



(H) 芦山温泉 (Lushan)

芦山は、埔里の奥座敷といった感じの、谷あいの小さな温泉地である。規模の割には有名なのか、



時折数台の観光バスが連なってやって来ることもある。霧社からは、日に4回しかバス便がないが、乗り過した場合は歩いてほしい距離ではない。

今にも車輪がはずれそうな南投バスに揺られて20分、終点の駐車場に降り立つと川のあちこちで

白い煙が立ち昇っている。吊橋を渡って左へ行けば、温泉の取水場、右は10分ほどで行き止まりになる。芦山での採集は、適当な伐採跡を見つけるのが最大のポイントと言える。山の斜面をごく小規模に伐採して、畑を造成していることがあり、そのような場所に行き当たると、カミキリ・ヒゲナガゾウ・ミツギリゾウ・タマムシなどを面白いように得ることができる。

ここでの目玉商品は、何と言ってもタイワンキスジトラカミキリ *Cyrtoclytus formosanus*。(写真22) チョコレート色の地に黒と黄の帯などを書けば、日本のキスジトラと大差ないように思えるが、その鮮やかさは天下一品である。南山溪でも稀に採集されてはいるものの、今のところ、芦山が最も確実な産地で、5月上旬よい材があれば一度に多数を得ることも夢ではない。天气が良いと *Xylo trechus magnicollis*、*X. formosana* *X. atoronotatus* (原名亜種) などをはじめとして多くのトラカミキリ類が材上を這い回り、ベニツヤカミキリ(写真23)、*Paraglenea swinhoei* (写真25)、*Xenohammus bimaculatus*、*Monochamus fascioguttatus*、*Thranis* 等も採集できよう。夏には *Palimuna* 2種も多い。

特殊なものとしては、クリの花に集まるキムネムラサキカミキリ *Aphrodisium yugaii* (写真21) とクリの新しい枝を後食する *Anoplophora lurida* (写真24) がある。後者は、体長13mmほど、水色の地に黒い斑点の入った可憐な種で、おそらく世界最小の *Anoplophora* であろう。クワの葉には *Glenea chujoi* がいるらしいから注意する必要がある。吊橋を渡って、すぐ左にある police box の横の小道を登ると、4月下旬に花の開くシイの木が2~3本ある。この花をたたくと、だいたい南山溪と同じものが採集できるが、上翅に青い金属光沢を有する *Pidonia* の稀種 *P. albomaculata* の記録が比較的多い。

材に来るタマムシでは、ツンベルクカドアカタマ・ヤマトタマ等の大型種のほかに、*Agriilus alazon*、*A. viduus*、*A. discalis* を初めとして *Agriilus* の仲間が非常に多い。小型ハナノミの *Mordellaria* は、一般に採集が困難なグループであるが、奄美大島特産の *M. triguttata*、*M. humeralis* のいずれも近縁種が得られており、興味深い。

(I) 松崗～梅峯 (Sungkang-Meifeng)

霧社から、翠峯行きのバスに乗ると、約1時間で、標高2004mの松崗に着く。バス停で下車して、採集の用意を整える。台湾も2000mを越すと、高山特有の透明な、ピリッと肌を刺す大気が、あたりを支配する。

まず、前に続くバス道を、次のバス停「梅峯」まで、ゆっくり歩きながら採集する。この道は、松崗部落の裏から始まる原生林をうまい具合に貫いているので、左右に常緑広葉樹の大木が目立つ。原生林の中は日中でも薄暗い。湿度も相当高く、木の枝から青白いコケの類が垂れ下がっている。

4月下旬～5月中旬ともなれば、白いカシ *Quercus* sp. の花が、この道の両側に間隔を置いて咲く。この花に竿を伸ばし、大口径のネットで、かぶせるように拘ると、おびただしい数の甲虫がネットに



入る。コメツキムシ・ハムシダマシ・ハムシが多いのが、松崗の特色といえ特色になる。このうちのコメツキムシを例にとると、8割を占める *Ectinus sonani* を筆頭に、*Shirozulus formosanus*、*Corimbites (?) speciosus*、*Ampedus (Pademus) bimaculatus*、*Gambrinus* sp.、*Denticollis monaldani*、*Melanotus restrictus* 等が採集される。この花に集まるカミキリムシは、台湾の平地のものとは、ガラリと趣が異なる。とりわけ、*P. albomaculata* を除く *Pidonia* が4種得られるのは、松崗ならでのことである。この他、*Le mula cyanipennis*、*Rondia formosa*、*Anoplodera breva*、*Molorchus kiyoyamai*、*Raphuma mushana*、*Halme eburneocincta*、*Cleomenes auricollis*、*Bunothorax takasagoensis* 等が同じ花上から採集される代表的なものである。

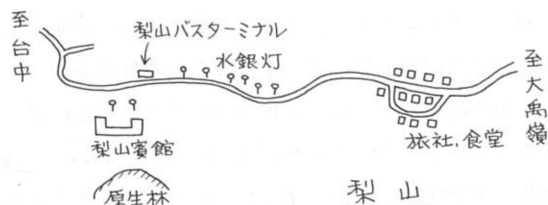
このバス道のコースは、1時間ほど歩くと、(脇道に入って採集しながらでも2~3時間で)台湾電力開発会社の門の前に出る。南西斜面の原生林はいったんここで終わり、広い伐採跡が右側に現れる。正面には梅峯のバス停が見える。バス停の裏は、伐採跡の方へ一段低くなり、下に赤レンガの民家が数軒ある。菜園と果樹園がその周りにちょこっとある。晴れた日には、背後に3000m級の東能高山の山稜がはっきりと望まれる。

この伐採地は、朽木性甲虫の格好の採集地となっている。コメツキダマシは、*Farsus* sp.、*Dirhagos* spp.、*Dirhagofarsus* sp. が、ナガクチキムシは *Bonzicus hipocrita*、*Phloeotrya* sp.、*Hypulus* sp. が、立枯れや倒木の表面に見られる。また朽木割りで、*Dorcus miwai*、*D. gracili-cornis*、*Aegus* sp. 等のクワガタムシが得られる。カミキリムシは、5月初旬~6月にかけて伐採地内の枯枝・枯づるのピーティングで、*Egesina fuscolaterimaculata*、*Exocentrus rufithorax*、*Doius fukudai* 等の珍しいフトカミキリの仲間が採集される。梅峯の採集地は、この伐採地一ヶ所につきるといってもいいくらいで、他では、まとまった成果があがらない。それでも時間の余裕があれば、梅峯のバス停から翠峯へ少し歩くとよい。バス道沿いはほどなくハンノキ林と杉の植林にかわり、やがて正面に原生林が現れる。この原生林に左から入る脇道が2本ついていて手前の道に旧北区系の台湾特産種である *Cicindela shirakii* が多い。この道の奥には、オオキノコムシがたくさん採れる古材がある。

5月初旬~中旬、ヒラタケ類のキノコに、*Episcapha asahinai*、*E. takasagona*、*Neotriplax arisana* (写真3) 等が集まり、古材の樹皮下から新成虫の *Aulacochilus issikii* (写真4) が採集できる。また、原生林内の枯枝のピーティングで、*Megalodacne okunii*、*Cyrtotriplax gre-svitti* (写真5) が、得られることもある。

(J) 梨山 (Lishan)

台中~花蓮を結ぶ東西横貫公路のちょうど中頃、標高2300mの観光地梨山は、しかし、山岳美以外これと言った見るべきものもなく、けばけばしい朱色の賓館の建物が場違いの印象を与える。周辺一帯には、梨とリンゴの畑が広がり、南国台湾に貴重な北国の香りを供給している。台中からの直達車(急行バス)は日に数回、花蓮からは早



朝1回きりで、それぞれ3時間、6時間を要す。

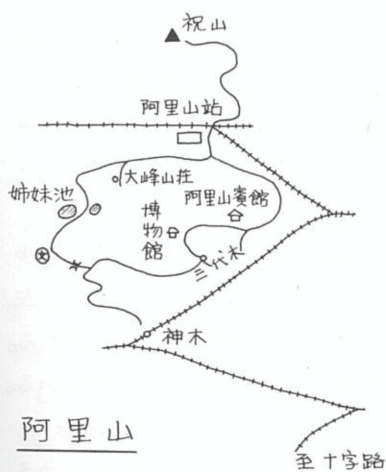
周辺が梨畑であるにもかかわらず、梨山では虫の個体数が非常に多く、うまくゆけば一獲千金の採集ができる。それは特に、良い花を見つけるのがポイントとなる。6月中旬つる性の花が満開になる頃が最も良く、この時期に花をたたくと、カバイロエグリ・ツヤエグリ・カバヘリエグリ・ホッポエグリ・カギエグリなどがいくらかでもネットに入り、その中に混ってミドリアシナガハナムグリ、ミワアシナガハナムグリも多数採集できる。ヨツスジエグリ・オスアカトラハナムグリなどは、一網で数十頭が入る位である。カミキリでは、日本のカエデノヘリグロハナの上翅をMetalic blueにしたような美麗種 *Eustrangalis viridipennis* の記録もある。ピーティングで得られる高山性の *Pseudale* は、南山溪などのものに比べ、上翅の隆起が極端に大きく、興味深い。

7月ともなると夜間採集をせずにはおれない。と言うのは、町の水銀灯を見て回るだけで、おびただしい数のクワガタ・コガネ類が得られ、特にクワガタは台湾中部の代表的ものすべてが採集できるからだ。タカサゴミヤマ(写真16)などは、一晩で200頭や300頭はすぐ集まり、台湾産ミヤマクワガタの珍品クリロミヤマ(写真17)も採集できよう。*Dorcus clypeatus*、*Macrodercas mochizukii* (写真19)、*Serrogathus cyanrauwensis*、*Prismognathus davidis* などもその珍客である。

梨山周辺は原生林がほとんど残っていない。そこで、花蓮や宜蘭方面へタクシーを飛ばし、じっくり採集してみるのも良いだろう。ただし、台中寄りの昔からの有名採集地達見は、近くにダムがあるので、採集はもちろん、写真撮影も禁止されている。

なお、8月中旬に、賓館の裏のわずかに残された原生林で、日本のアカジマトラよりはるかに美しい *Anaglyptus meridionalis* とタイワンベニボシカミキリ *Eurybatus formosana* が採集されている。

(K) 阿里山 (Mt. Alishan)



埔里から阿里山へ行くのは、一日がかりである。例えば、埔里を8時のバスで出発すると台中着9時30分。台中発10時30分の汽車で、嘉義着12時15分。ここで阿里山森林鉄道に乗り替える。森林鉄道の切符は、駅の正面外側、街に向かって右側の小さな窓口で販売している。場所がわかりにくいので、警察に聞くと親切に教えてくれる。嘉義発13時(中興号)奮起湖着15時10分。阿里山へは16時25分となる。森林鉄道は一日5往復あるが、朝と昼過ぎの時間帯に集中しているので、注意が必要。それに料金が減法高い。(中興号の場合日本円で2600円位)

さて、阿里山駅の周囲はほとんどが杉林で、ピーティングのできる所と言えば、姊妹池付近、神木付近しかない。他には広葉樹林がないのだ。玉山(新高山)からの日の出を見るためのバスが、早朝、祝山(2400m)へ登るから、これに便乗し頂上で吹上げを待つのも一法であろう。6~7月頃ならば様々な甲虫が飛来すると言う。線路沿いに神木まで下ってみるのも良い。花があれば、*Le mulla*、*Pidonia* 等ハナカミキリが採れ、神木周辺でのスウィーピングでは、新種の *Phyrrhalta*、一見オサムシ風の *Apterogaleruca uenoi*、*Longitarsus* sp.、*Cryptocephalus* sp. など、かなり面白いハムシ類が多かった(4月下旬)

奮起湖～十字路～神木間の鉄道沿いには、広葉樹の原生林が続き、途中下車したくなるが、奮起湖～十字路間の原生林は立入禁止である。神木から線路沿いに30分ほど下ると、左手に林道の入口がありこの付近で枯枝を叩くと、*Parapolytretus rugosa*、*Doius fukudai*や*Caccia*などの中型フトカミキリが得られ、原生林中には、ザウテリオサ*Apotomopterus sauteri*(写真14)や稀に、山地型タイワンカブリモドキ(写真13)も産する。また、クワガタの珍品ウスバクワガタの記録もある。

阿里山の街には旅社が多く、博物館もあり昆虫が少々展示されている。虫屋向きの旅社は、大峰山荘で、すぐ前の灯火にクワガタが飛来する。なお、阿里山では霧雨のため、気温が15度以下になることが多く服装には気をつけた方がよい。

(L) 奮起湖(Fenchifu)

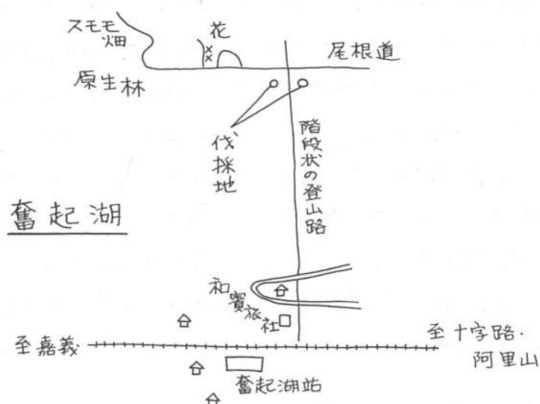
奮起湖と阿里山はまったく変な所である。奮起湖(標高1300m)は芦山温泉と、阿里山(標高2200m)は松崗と同じ標高であるのに、産する虫の顔ぶれが、相当異なるのである。カミキリに関しては、それほど差はひどくないが、ハムシ・コメツキ・チョッキリ・ゾウムシ・ベニホタルなどのFamilyでは、ここでしか採れないものがずいぶんあるのだ。しかし、杉の植林が多いので虫の個体数はそれほど多いとは言えない。

さて、和資旅社の少し右側に、山手に向う細い道があり、眼前に迫る山の尾根へと駆け登る。階段状の山道の直登はかなりきついが、20分ほどで尾根へ出る。ここに大きな平坦な岩があって、休憩にちょうど良い。この岩の手前の左右の伐採木をピーティングすると、茶色の地に白の亀甲も鮮やかな格調高い*Exocentrus*や*Neosybra*など小型カミキリが採れる。しかし、ここでは風に乗って飛来する虫をじっくり狙っても良いだろう。吹き上げというわけではないが、陽溜りの中を様々な甲虫が飛ぶ。

さて、道はここで三方に分かれ、尾根筋を左へとる。林の中を5分ほどゆけば、やはり伐採木が少しありコウザンドウボンや*Nanoha mus*等のカミキリが得られる。さらに進むと、右側がスモモ畑、左側が原生林となり畑の縁で花を捜せば、松崗と似たようなハナカミキリ・トラカミキリ類が得られる。4月下旬には、*Pidonia binigrosignata*、*Strangalia semichujoi*という新種が記録されている。スウィーピングでは、黄色地に赤く縁取られたチョッキリの美麗種や、カタピロハムシの珍品*Termaspiis shirakii*が採れることもあり、後者は前胸にカミキリのような突起のある大型種で、カミキリと間違った者もいるくらいだ。

街の灯火には、7月になると多くのクワガタが集まり、ミワオオクワガタ・センクリングオオクワガタ・タイワンネプト・*Cyclomnatus scutellaris multidentatus*・*C. albersi asahinai* タイワンミヤマ・オニツヤクワガタなどが得られるだろう。また、数は少ないとは言え、ここはテナゴガネの最も確実な産地でもある。糞虫も種類数が多く、クロセンチ・タイワンセンチ・ウシズノエンマや珍品アトトゲンマなどが採集されている。

(後編「Ⅲ南部低山地」へつづく)



富士山周辺のカミキリ

— 追加記録(1) —

露木 繁雄

甲虫屋サロンでの誇大広告的な宣伝が効いたのか、「さやばね」No.1に掲載した「富士山周辺のカミキリ」の効き目があったのか(我田引水かな)、いずれにせよ、今年(1975年)の富士山は多数の人が採集に訪ずれてくれるようになり、新記録が続々と生まれたため、すぐ続編を書かなければならぬハメになってしまった。

小生も今年だけで5月から9月にかけて、富士山周辺には7回ほど採集に出かけたが、この追加記録を執筆するにあたり、以下の方々の絶大なご協力をいただいた。紙面を借りてお礼申し上げる。

小比賀正敬、小宮次郎、木村欣二、鈴木和利、海老原裕之、近藤文男、小野直史、桑久仁雄、平井勇、笠原須磨生の各氏で、特に海老原、近藤、小野の三氏は、6月末から9月上旬まで、ほとんど毎週調査を行い、貴重な記録を数多く追加して下さった。

また、衣笠恵士、新井久保、中村俊彦、丸岡宏、須賀邦耀、鎌苅哲二、小田義宏、川田一之、関根浩二の諸氏からの情報も利用させていただいた。

■ 追加記録

160. *Encyclops olivacea* テツイロハナカミキリ

18. V. 1975, 青木ヶ原(小比賀) 1頭カエデの花上より得られた。カエデの樹種は不明。

161. *Gaurotes aureopurpurea* クビアカハナカミキリ

27. VI. 1971, 鳴沢林道(平井 勇): 20. VII. 1975, 富士山林道(小宮・露木・桑)他多数: 1975年はこの種としては全般に遅い発生だったもようで、8月31日まで採集された。また個体数も非常に多く、7月20日にはハコネウツギの花で約40個体が採集されている。

162. *Pseudosieversia japonica* チャイロヒメコブハナカミキリ

27. VII. 1975, 富士林道(川田一之): 3. VIII. 1975, 富士林道(近藤文男)

2例ともミヤマイボタの花上から採集された。この種も富士山に分布しているであろうと、ある程度予想はされていたが、これほど早く記録されるとは考えていなかった。

163. *Pidonia* sp.

4. VII. 1971, 表富士(露木) 1♂: 20. VII. 1975, 富士林道(小宮次郎, 露木1♀, 小野直史1♂)

27. VII. 1975, 富士林道(川田) 1♀: 3. VIII. 1975, 富士山林道(露木) 1♂

この種は現在まで北アルプス・南アルプス・大菩薩山塊・奥日光などで採集されており、比較的高所に分布している *Pidonia* である。 *P. mutata* と *P. maculithorax* に極似しており、同定はなかなか困難である。近い将来、東京農業大学昆虫学研究所の窪木幹夫氏により新種として記載されると聞いている。

164. *Judolidia bangi* ヌバタマハナカミキリ

7. VII. 1975, 青木ヶ原(小比賀): 27. VII. 1975, 富士林道(海老原裕之)

165. *Leptura latipennis* ハネビロハナカミキリ
3. VII. 1975, 富士林道(小野)
166. *Necydalis formosana niimurai* トガリバホソコバネカミキリ
29. VI. 1975, 青木ヶ原(鈴木和利)
167. *Allotraeus sphaerioninus* トビイロカミキリ
29. VI. 1975, 青木ヶ原(海老原) : 7. VII. 1975, 青木ヶ原(小比賀)
168. *Pyrestes haematicus* クスベニカミキリ
28. VII. 1975, 青木ヶ原(笠原須磨生) : 29. VII. 1975, 西湖(鈴木) : 3. VIII. 1975, 青木ヶ原(海老原、近藤、小野)
169. *Xylotrechus villioni* オオトラカミキリ
24. VIII. 1975, 富士林道(海老原) 1頭、31. VIII. 1975, 富士林道(海老原) 1頭、小野 2頭
北海道を除くと、1日で複数の個体が採集されたことはほとんど聞かない。最初の1頭はウドの花から得られたという。その他は葉上に止っていたもの、叩網で落ちて来たものなど。
170. *Teratoclytus plavilstshikovi* ハセガワトラカミキリ
29. VI. 1975, 青木ヶ原(鈴木) : 20. VII. 1975, 富士林道(小宮、露木) : 2. VIII. 1975, 富士林道(小田義宏)
上記の記録のほか、精進口登山道2.5合目付近で丸岡宏氏が6月末頃11頭採集している。
171. *Xylariopsis mimica* クビジロカミキリ
7. IX. 1975, 富士林道(海老原)
172. *Sybra sakamotoi kuri* クリチビカミキリ
29. VI. 1975, 青木ヶ原(海老原) : 7. VII. 1975, 青木ヶ原(小比賀) : 27. VII. 1975, 富士林道(海老原) : 他
173. *Sybra flavomaculata* キボンチビカミキリ
2. VIII. 1975, 富士林道(小田)
標高約1700mで、キボンチビの記録としてはかなり高い所のものと思われる。
174. *Monochamus saltuarius* カラフトヒゲナガカミキリ
11. VIII. 1975, 青木ヶ原(大桃定洋) : 31. VIII. 1975, 富士林道(海老原)
この種としては2つともかなり時期的に遅い記録と思われる。
175. *Acalolepta luxuriosa* センノキカミキリ
20. VII. 1975, 青木ヶ原(関根浩二)
176. *Annamanum griseolum* ゴマフキマダラカミキリ
26. VII. 1975, 富士林道(糸) : 27. VII. 1975, 富士林道(川田) : 31. VIII. 1975, 富士林道(小野) : 7. X. 1975, 滝沢林道(平井 勇)
177. *Terinaea atrofusca* クリイロチビクブカカミキリ
20. VII. 1975, 富士林道(小宮、露木) : 他
178. *Clytosemia purchra* ジュウジクロカミキリ
26. VII. 1975, 富士林道(糸)

179. *Pogonocherus seminivus* ネジロカミキリ

18. V. 1975, 青木ヶ原(小比賀) : 20. VII. 1975, 富士林道(海老原) : 他

180. *Leiopus montanus* ミヤマモモブトカミキリ

10. VII. 1974, 富士林道(小宮) : 20. VII. 1975, 富士林道(小宮、露木、海老原、近藤、小野) : 他
(ただしすべて富士林道)

富士林道では針葉樹の倒木の枯枝などからかなりの個体数が採集された。個体数が多かったせいかもしれないが、針葉樹ばかりでなく、広葉樹の枯枝や生木の叩網でも相当な個体が得られた。

これらの個体は、すべて日光付近のものと斑紋などの感じが異なり、一見ゴマダラモモブトともまぎらわしい。筆者は不勉強でよく調べていないが、畏友小宮次郎氏によれば、四国剣山などで採集されている個体ともよく似ており、日光周辺と四国との中間のようなものだが、*L. montanus* であることには間違いないだろう——とのことである。筆者の手元に南アルプス南部の井川峠の個体があるが、富士山のもので酷似している。*L. montanus* については、もう少し各地のものを集めて検討する必要があるが、富士山以外の場所では、なかなか十分な個体数が得られない悩みがある。

181. *Eryssamena sapporensis* ホウノキトグバカミキリ

18. V. 1975, 鳴沢村(材採集) 10. VI. 1975 (羽化 = 露木)

ホウノキの枯枝を持ち帰ったところキッコウモンケンカミキリなどととも羽化した。

182. *Paramenesia theaphia* ジュウニキボシカミキリ

26. VIII. 1973, 表富士(鈴木) : X. 1973, 河口湖町大嵐(材採集) 23. IV. 1974 ~ 24. V. 1974,
(羽化 = 平井)

センノキの枯枝より羽化。

183. *Paramenesia kasugensis* カスガキモンカミキリ

20. VII. 1975, 青木ヶ原(近藤)

非常に貴重な記録である。生木の叩網で得られたとのこと。

184. *Epiglenea comes* ヨツキボシカミキリ

3. VIII. 1975, 青木ヶ原(近藤)

■ その他の興味ある種

以上が新しく追加された種類だが、他に一言ふれておきたい記録がいくつかある。

1. ニセハイイロハナカミキリ

14. IX. 1975, 西湖(平井) : 28. IX. 1975, 富士林道(平井・3頭) : 2. XI. 1975, 富士林道(平井・15頭)

採集された詳しい状況は聞いていないが、おそらく樹皮をはがしたものであろう。

2. フタスジカタビロハナカミキリ

26. V. 1975, 表富士(露木、鈴木各1頭) : 28. V. 1975, 表富士(小比賀・1頭)

飛翔中のものが小宮氏により1頭採集されていたが、須賀氏がヤマジャクヤクがかなりあると話しておられたので、ぜひこの花で採集してみたいと思っていた。当日偶然ヤマジャクヤクの群落をみつけ、およそ100ぐらいの花をみて回り、運よく2頭採集できた。花の状態は少々遅かったようで、散っていたものもかなりあった。また半開程度のものの方が好まれるようで、1頭は花の中が少々見え

る程度、もう1頭はまだ開いていない花の中にいた。なお、花弁を後食した痕があった。

3. アカイロニセハムシハナカミキリ

14. VI. 1975, 表富士(露木)

満開のズミの花より得られた。詳細なデータのものなかったので再録した。

4. フジヒメハナカミキリ

27. VIII. 1975, 富士林道(海老原)

北富士で初めて採集された。北側にはいないのではないかと思われたが、これでもう少し標高の高い所を早い時期に調査すれば、もっと個体数が得られる可能性がでて来た。なお、西側の塙塚(とやづか)付近では、鈴木和利氏の努力で分布していることが確認された。

5. フジコブヤハズカミキリ

表富士では多数採集されていたが、平井氏の調査で、秋に北富士にも多いことが確認された。なお、表富士でまた1頭、フジコブヤハズとセダカコブヤハズの間中型のような個体が、須賀氏により採集された。

6. チビコブカミキリ

7. IX. 1975, 富士林道(海老原、他)

1本の倒木から100頭以上採集されたが、ほとんどの個体が非常に大きく、色彩も灰色がかった、変わったもので、詳しく調べてみる必要があるようである。

7. シロオビドイカミキリ

8月から9月にかけて、富士林道では相当の個体数が得られた。

これらの他、モモグロハナ・タケウチホソハナ・クロホソコバネ・ヨツボシ・アオ・チャボヒグナガなどが再確認記録として注目されるものである。

■ おわりに

富士山のカミキリはこの追加記録25種を加えると184種となった。まだ、間違いなく分布するであろう種類もかなりあり、特に春から初夏にかけてのカミキリは未調査の所が多く、今後大いに調べてほしいものである。

また今年(1975年)は天候不順で、青木ヶ原や富士林道では、カミキリがよく集まる花、カエデ・ノリウツギ・リュウブなどがほとんど咲かず、花での採集は非常にしにくく、あまり成果が挙げなかったのは残念であった。

なお、笠原須磨生氏の手紙に興味ある記録が書かれていたので引用させていただく。少々アレンジさせてもらったが『1975年7月28日に国道139号線沿いの富岳風穴～赤池間のノリウツギの花で、キベリカタピロハナ(*kusamai*)とクスベニを同時に採集、妙な顔合せで面白く思った』という内容であった。標高は900～950メートルぐらいしかなく、キベリカタピロハナの採集記録としては異常に低いものではないだろうか。

これなども青木ヶ原周辺の、ひいては富士山という山の底知れぬ大きさを示す一例とも思え、私自身いよいよ興味を湧くと同時に、一層読者諸氏に調査をお願いする次第である。

(▽ 213 返子市返子7-1-24)

編 集 後 記

▶ 甲虫屋の海外ブームに先がけ、台湾の採集地案内をお届けしました。6人の著者による軽妙な案内にまどわされ、急拠台湾行きを決めこんだ方もあったのではないのでしょうか？(私もそうでした)

▶ 現在、日本の甲虫については非常ないきおいで、知見の増大→整理が行なわれていますが、台湾に関しては九州程度の規模で日本全土の数倍、といわれる豊かな昆虫相が知られながら、例えばカミキリなどでも Gressitt (1951) 以来まとまった文献はほとんどなく、そのほかの甲虫でも短発的な報文が多いのが現状です。ごく最近では益本仁雄氏により食糞性コガネムシの分野がまとめられつつありますが、他の甲虫についてもこのような整理の必要が強く感じられます。

▶ 採集案内を機会に台湾を訪れる人が増えるようになり、全国の甲虫屋で台湾産の甲虫相解明委員会みたいなものを作って、計画的に図鑑の発行-----夢でなく、実際に作ってみたいものです。オールカラーの台湾産甲虫大図鑑を！

▶ 次号は採集地案内の「後編」と共に、衣笠恵士・田添京二・大桃定洋氏らによる「福島県のカミキリ特集号」を組む予定です。(藤田)

○ 事務・会計報告

大変遅くなりましたが、会計を報告いたします。創会時から昨年末までの収支決算は下表のとおりです。次期繰越が 240,890 円ほどありますが、これは 1975 年度発行分の ELYTRA vol.3 Nos.1~2 の印刷代を含めない状態で、印刷代 296,000 円と送料約 50,000 円を差し引きますと、100,000 円近い赤字になっております。

収 支 決 算 報 告
(1973年9月1日~1975年12月31日)

収	入	支	出
入 会 金	113,000	ELYTRA vol.1 No.1 印刷代	98,500
1974 年度分会費	392,000	ELYTRA vol.2 No.1 印刷代	124,500
1975 年度分会費	356,000	ELYTRA vol.2 No.2 印刷代	148,000
1976 年度分会費	22,000	さやばね No.1 印刷代	165,000
1976 年度以降分の会費	3,500	パンフ類印刷代	15,000
別 刷 代	5,500	送 料	93,265
広 告 料	30,000	事務関係費	37,720
預 金 利 子	105	次 期 繰 越	240,890
雑 収 入	870		
	922,975		922,975

会の経済状態は非常に苦しく、最低限の目標として、1年に16~24ページの「ELYTRA」を2冊、30~50ページの「さやばね」を1冊出したいと努めておりますが、それだけでも700,000~800,000円の費用がかかり、現状では火の車の状態です。掲載していきたい論文や、とりくんでいきたい計画は多くあるのですが、まず経済上の制約により会誌発行も思うようにいきません。とりあえずの第1次経済政策として、1977年よりの会費のスライド制値上、維持会員・希望による印刷代著者負担制度の設置、広告に

よる増収などを計りましたが、会員諸氏にはよろしく御協力のほどをお願いいたします。また、会員が増えればそれだけ経営が楽になりますので(在庫は滞貨になるから)、まだ入会になってないお知り合いの方などに本会を御紹介下さるよう、併せてお願いいたします。(単純計算でも「ELYTRA」なら3人で1ページ、「さやばね」なら1.5人で1ページの増ページができます。)

最後に、昨年末から今年にかけて事務処理が大幅に遅れ、会員諸氏には多大な御迷惑をかけたことをご深謝いたします。(日本鞘翅目学会事務局)

T T S 甲虫海外図鑑・図書

- ◇ Mohres, F.P. Kafer
原色図鑑 世界の甲虫 (BV-008) ¥2,690 (▽360)
256頁, 116原色図版。ライターの図鑑のブートをそのまま使用したポケット版。オサムシ,
カミキリ, コガネなど著名甲虫を掲載。
- ◇ Crawson, R.A. The Natural Classification of the Families of Coleoptera
(2nd.ed.) (CS-021) ¥2,660 (▽400)
甲虫の科の自然分類
222頁, 213図。甲虫分類の基本図書の1つです。
- ◇ Arnett, R.H. The Beetles of the United States -A Manual for Identifi-
fication- (AE-101) ¥11,100 (▽480)
合衆国の甲虫類
1,112頁, テキスト図多数。アメリカの甲虫全属の検索が出来, 引用文献多数。
- ◇ Jaques, H.E. How to Know the Beetles.
北アメリカの甲虫類 クロス版 (WB-BO3) ¥2,850 (▽400)
372頁, 865図 スパイラル版 (WB-003) ¥2,200 (▽400)

The Fauna of British India, including Ceylon and Burma.
英領インドの動物誌

Fowler, W.W.: Coleoptera General Introduction & Cicindelidae (TT-001) ¥5,920 (▽400).
Maulik, S.: Chrysomelidae, Galerucinae. (TF-001) ¥8,970 (▽440).
Maulik, S.: Chrysomelidae, Hispinae & Cassidinae. (TT-005) ¥4,580 (▽440).
Jacoby, M.: Chrysomelidae, Sagrinae-Lamprosominae. (TT-002) ¥8,075 (▽400).
Gahan, C.J.: Cerambycidae. (TT-006) ¥3,950 (▽400).

この他多類在庫タイトルあり, コードTFはオリジナル版, TTはインドでのリプリント版

- ◇ 岸井 尚 日本産コメツキムシ科別刷集(1955~1976)15篇セット ¥5,000 (▽440)
- ◇ 桑山 覚 南千島昆虫誌 ¥1,800 (▽400)
- ◇ 大野 正男 日本産ハムシ科名乗 ¥1,500 (▽360)

ご注文・ご予約ともハガキに署名・捺印の上お申し越し下さい。直ちにお送り致します。代金は到着後5日以内にご送金下さい。(但し, 未成年者は保護者の署名・捺印も)。

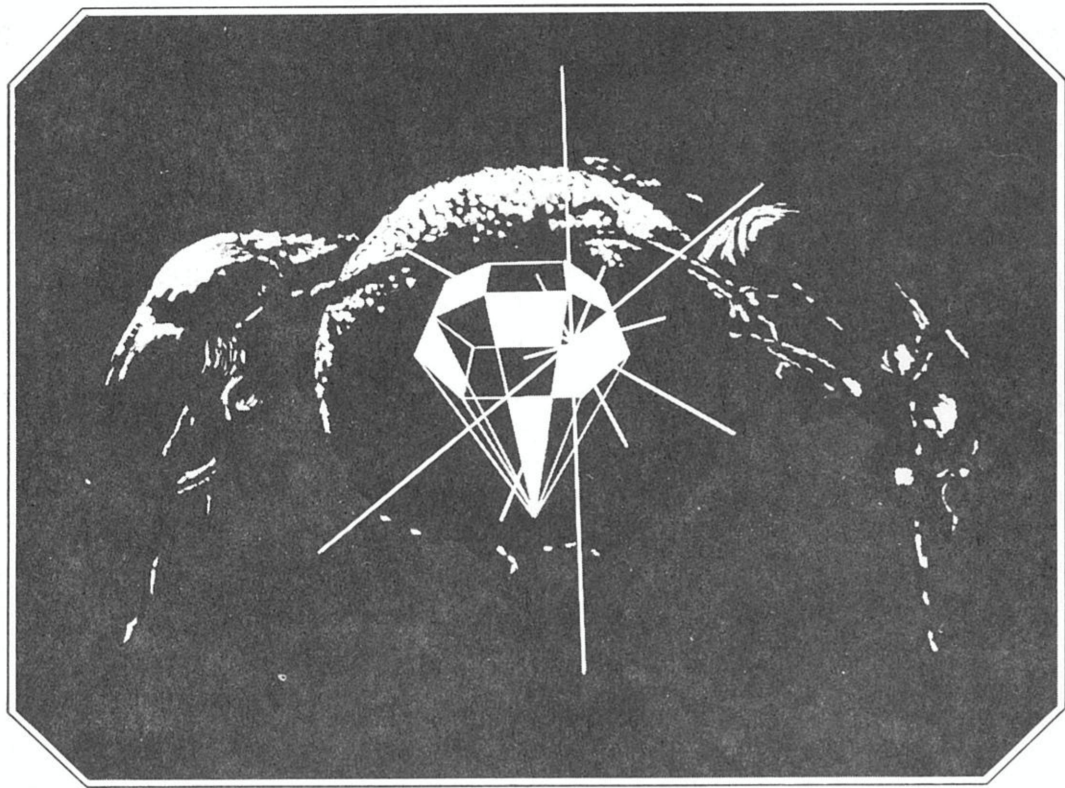
お近くの方は小社カタログショップ(小田急経堂駅前・小田急経堂ビル12F1221号)へ! 昆虫洋書常時300タイトル以上在庫。

昆虫・動植物海外図鑑・学術書(旧パピヨン)
東京通販サービス社

〒156 東京・千歳郵便局私書箱33号
TEL(03)426-6012 郵便振替 東京0-73, 156

在庫リスト(要 100) リスト発行年4~5回

さやばね No.2 昭和51年8月31日発行
編集者: 藤田 宏 印刷所: 岩峰社
発行者: 日本鞘翅目学会(▽110 東京都台東区東上野4-26-8, 福田惣一方)



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 《ドイツ型標本箱》

自然はますます大切なものとなってきました。この不思議な世界を解明する貴重な手掛りとなる昆虫標本は、価値あるものとして永久に保存したいものです。

そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届けします。

*すばらしい特長

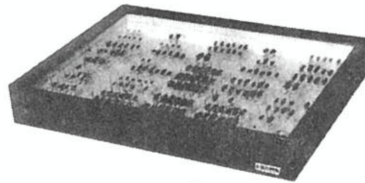
- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラゾールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底

●高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあり。

〒113 東京都文京区湯島二丁目二番五号 三〇三(八一)四五四七
ヨイシナ
郵便振替 東京一三三七九

(有)タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和49年4月現在のものです